

2022年度 事業報告

施設名 東北沢つどいの家

1 利用状況

事業種別： 生活介護 定員 7人 利用者数 10人

(1) 障害支援区分

区分6	10人	区分5	0人	区分4	0人	区分3以下	0人
計	10人						

(2) 障害の程度

		身体障害者手帳				計
		1級	2級	3~7級	なし	
愛の手帳	1度					0人
	2度	3人				3人
	3~4度					0人
	なし	7人	0人			7人
計		10人	0人	0人	0人	10人

(3) 年齢、性別

10代以下	0人	40代	1人
20代	5人	50代	1人
30代	2人	60代以上	1人
計		10人	

男性	5人
女性	5人
計	10人

2 事業実施状況

(1) 活動・支援の内容

- ・開所日数 243 日で延べ利用者 1559 人、一日平均 6.4 人の利用で、平均利用率 91.7%だった。前年度と比べると、平均で 0.3 人、利用率で 1.4%向上した。9 月から新しい利用者が週 1 日の通所をスタートさせた事と、利用者が罹患したり濃厚接触者になったりする事が少なかったのが利用率の向上につながった。
- ・コロナ禍の終息が見通せず、訪問支援と高齢の利用者の利用再開はできず、今後も状況の改善が見られない事から高齢の利用者は今年度いっぱい退所する事になった。
- ・事業所内の感染対策に加え、利用者各家庭での協力もあって、施設内での感染拡大などに繋がらず事業を継続できた。
- ・精神的に不安定な状況を抱えている利用者は今年度も多く、個別に話を聞く機会を多く設けながらメンタルに対する支援も重視した。
- ・ボランティアの協力が必要なイベントは感染防止の観点から全て中止としたが、事業所の前でミニバザーを開催したり、避難訓練で近所の公園に移動したり、個別での買い物を再開したりするなど、少しずつではあるが外に出掛ける機会を設けた。
- ・地域生活の維持のために高齢の保護者への支援が必要になるなど所謂 8050 問題が深刻になっており、ケースワーカーやケアマネジャー、成年後見人など、関係する多くの職種と連携しながら支援状況の確認や情報の共有を行った。

※行事等	※一日のスケジュール
<ul style="list-style-type: none"> ・4月 ・5月 健康診断 (10・20・27・31日) ミニバザー (28日) ・6月 法人総会 (7日) ・7月 実習生受け入れ (15・22・25日) つどいのお発送 (21・22日) ・8月 暑気払い (20日) ・9月 コロナワクチン接種 (3日) ・10月 インフルエンザ予防接種 (15日) ・11月 障害者アート展 開催 ※見学は中止 ・12月 年賀状作成 (8日)、忘年会 (28日) 冬休み (29～1/3日) ・1月 新年会 (31日) ・2月 自衛消防訓練 (24日) ・3月 保護者会 (13日) 納会 (30日) 	<ul style="list-style-type: none"> 8:45 職員ミーティング 9:45 来所時間 10:00 朝の準備・朝のミーティング 10:15 午前の活動 11:30 昼食・昼休み 14:00 午後の活動 15:15 帰りのミーティング・帰り支度 15:50 退所時間 16:20 職員会議 ほか
<p>※日中活動内容</p>	
<ul style="list-style-type: none"> ・ セルフ 	<p>自分の時間の使い方やスケジュール管理を経験することを趣旨として行っている活動。 自分が担当となるフリーの内容を考えたり、イベントや振り返りを行ったりしてもらい、考えたことを経験につながるような支援を心がけた。</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・ ミーティング 	<p>月間スケジュールや行事内容の確認・振り返り等を全員で話し合い、「自分の考えた事をしっかりと伝える」機会としての活動。 新しく加わった利用者に対して、職員からだけでなく利用者間でも内容の説明をする姿も見られた。</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・ イベントミーティング 	<p>暑気払い、忘年会、納会で、利用者がそれぞれ「午前・昼食・午後」の3グループに分かれて、企画・準備をするために話し合う。 「自分たちで考えた事を実施する」経験を重ねてもらおう事を主旨としていたが、自発的な意見を引き出す事が難しかった。</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・ レザークラフト+α 	<p>自主生産品を販売する機会が今年度も少なく、作業に対する利用者のモチベーションを保つために、事業所の前でのミニ販売会などを行った。保護者や関係者の来所があり、製品が売れたことで制作意欲が高まった。</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・ レザー会議 	<p>自主生産品の製作に利用者の意見を取り入れようという趣旨で今年度新たにスタートしたが、利用者が意見を出すために必要な情報提供を十分に行えなかったために、職員からの説明を聞くだけの状態が多くなってしまった。</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・ 美術表現 	<p>4月：菖蒲、5月：大漁旗、6月：うちわ、7月：金魚ねぶた、8月：三色団子、9月：ダリア、10月：イガグリ、11月：うさぎ、12月：招き猫、1月：恵方巻き、2月：メジロ、3月：春のコラージュ 主に季節を感じられるものをモチーフにし、具体的に作成者のイメージをできるようなテーマを設定した。</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・ 美化 	<p>普段利用している空間を整理することを目的として、「訓練室」「トイレ」「倉庫」を中心に数名ずつ担当になり、掃除機かけやマット拭き、洗面台・便器磨き等を行なった。単なる清掃活動でなく自動運動のきっかけに繋げることができた。</p>

<ul style="list-style-type: none"> サークル 	<p>「楽しみながら自分で身体を動かす」ことを目的として、ボーリングや風船バレーなどをゲーム性の高い内容で活動した。各々が参加しやすい方法を全員で相談してルールを変えたことで、身体の運動だけでなく利用者の主体性や積極性の向上にも繋がるように支援した。</p>
<ul style="list-style-type: none"> リハビリ (PT) 	<p>隔週で理学療法士の専門的な指導を受ける。 毎回、活動後に職員全員で振り返りを行い、利用者個々の状況を確認しながら今後予想される問題や生活環境の変化を共有して対応できるように話をした。</p>
<ul style="list-style-type: none"> リラックス・リハ 	<p>リハビリとは違った「ゆったりとした雰囲気」で、車イスから降りて身体を伸ばしリラックスする時間として実施する。 来所している間は車イスから降りる機会の少ない利用者も、身体を伸ばす機会を増やす事ができ、側弯の予防につなげる時間を得られた。</p>
<ul style="list-style-type: none"> フリー 	<p>「みんなと一緒にやりたい事を考えて実行する」ために、利用者が企画者となって1日もしくは半日の活動を考えて実施する活動。「企画する」事に対してはスムーズになってきたが、職員のサポート方法によって企画が右往左往する事もあり、統一した支援の仕方が課題となった。</p>
<ul style="list-style-type: none"> 生活 	<p>身体や日常生活に関する話のほか、クイズやトランプゲームなど、「楽しみながら頭を使う」といった要素も加えて活動した。日常生活に関する話では、「誰かにやってもらうこと」ではなく「自分事」として捉えられるように支援した。</p>
<ul style="list-style-type: none"> もぐもぐタイム 	<p>週末の午後にゆっくりと語らう時間として、今年度からスタートした活動。 みんなで雑談を楽しんでみたいと考えていたが、全員のペースや興味が揃わず、職員主体の活動となってしまった。</p>

(2) 地域交流

- 地域との新しい連携を模索する計画だったが、イベントや活動の自粛もあり、町会の会合に参加する程度で新しい関係性を築く事はできなかった。
- 社会資源の一端として近隣イベントへの参加を計画に盛りこんでいたが、実現できなかった。ただ、法人のホームページ改訂にともない、東北沢で毎月発行している広報紙を掲載するなど情報発信に力を入れた。

(3) 家族、関係機関との連携等

- 年度末に保護者会を開催。ほぼ3年ぶりとなる中で、次年度の活動予定や情報交換を行う。初めて顔を合わせる保護者もいて、直接話ができ事は好評だった。
- 高齢の保護者との生活が難しい状況（8050問題）に対して、行政や高齢福祉とのケース会議で情報を共有するなど、多職種連携に努めた。

(4) ボランティアや実習生の受入れ

- 今年度もコロナ禍で外出などが難しく、ボランティアの受け入れは行えなかった。体験実習の受け入れも同様に実績を残せなかった。
- 施設利用に対する実習の受け入れはあり、9月からの利用スタートに繋がった。

(5) 危機管理

- コロナ禍にあって「安心して通所できる」事を重視していた事もあって、事業所内での感染拡大や閉所といった事はなかった。
- 災害備品の確認・整備を実施した。

- ・ 町会など地域との災害時の連携については、継続課題となっている。

(6) 職員研修の実施

- ・ 法人が導入したオンライン研修を活用する事で、各々が意欲的に研修へ参加する機会が増え、これまでよりも積極的にスキルを身につける事ができた。

(7) その他（苦情・事故等）

- ・ ヒヤリハット（計6件 給食発注ミス、服薬の確認ミス ほか）
昨年度よりも大幅に報告件数が減っている（昨年20件）。注意をした事で事象の減少もあるが、記載に関する基準や認識に個人差があるために、潜在化しているケースもある。
- ・ 所内での事故（計7件 送迎配車ミス、バイタルチェック漏れ、業者への支払い漏れ ほか）
単純なミスが主だが、報告を共有する事で重大事故に繋がらないように努めた。
- ・ 報告書を回覧して情報の共有をしてはいるが、事故報告やヒヤリハットに対する意識の統一が今後の課題である。

3 重点課題と取り組み・成果

① 誰でもわかる

- 利用者の人生や家庭環境など過去の背景を受け止め、将来への支援に繋げていく為に、フェイスシートをはじめとした個別資料の見直しと介助方法などを明文化すること、また、日々の活動や行事も原点に立ち返り、その意味を利用者と一緒を考えながら支援計画を実施することを目指して支援を行ってきた。

日常活動の確認や保護者と情報交換を行っている連絡ノートへの記載は、支援や活動の様子を伝えられるような記載となってきた。個別資料の基礎となる活動記録も内容が伝わりやすいものになってきた。

② 伝える・伝わる支援

- 利用者の声を介助者の価値観で捉えてしまわないように「聴く力」を養いながら、一方的に「伝えたつもり」にならないように注意しつつ、セルフ活動やミーティングの時間などを活用して「どこまで理解したか」を互いに確認しながら支援を行うように心がけてきた。

利用者の声を聴く力や伝わったかどうかを確認するために、活動やイベントの話し合いや振り返りを繰り返し行った。丁寧に議論を重ねた事で、話し合いでの自発的な発言の回数やその内容の質が向上した。

③ 10年後を見据えて

- 利用者個々のストレングスを本人や保護者などと共有し、『自分らしさ』の発見や自覚に繋がられるように、今の自分（個性や生活環境）をキープ出来るように支援を行ってきた。

「リラックス・リハ」をはじめとして身体をケアする時間を多く設け、二次障害の予防や発見に繋がる活動は増やす事ができた。個別に話を聞いたり、丁寧な説明を繰り返したりした事で、今の自分の状況を知る機会も増えた。